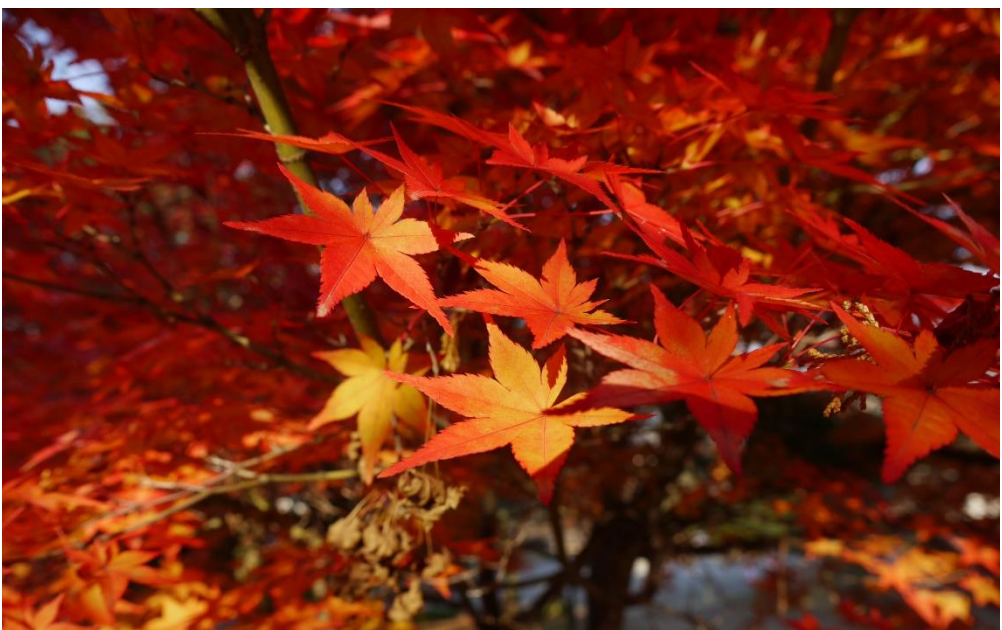


京都の紅葉

旅は人 旅は人生

長谷川 正弘



日本には四季がある。しかし、老若男女を問わず心地よく自然に触れられるのは、やはり春と秋なのである。因みに所謂、観光行楽シーズンでもある。しかし、以前にも書いたように、私はその春と秋が嫌いな時期が在りた。しかも、人混み多くの人出、酔い、は苦笑、何故かは書かないが特に酔いについては、ある種のトラウマがあった。ですから、花見、紅葉狩り等考えてもみなかたし、ついには言うなら、祭りにものれなかつた。しかし、京都、奈良好きの私共が偶然、奇しくも櫻の良い時期に行き合わせ(普通なら良いと云われる時期を過ぎた頃行つたのに…)、京都の櫻、京都の花見を体験し、素直に感動できた。そして、それなら秋は…?とも思え、特に狙ったわけでもなく紅葉の頃に行き、これまた奇しくも紅葉のいい時期に当たった。春も秋も最初に乗ったタクシーの運転手さんが、今年の櫻(紅葉)…は遅くて…」と話されるのを聞きつつ、スタートしたが、しかし京都に居る三日間の内に櫻は七分咲きから満開、そして櫻吹雪や花筏…までの変化を見ることが出来、紅葉も同じく緑から紅葉へのグラデーションが綺麗な時期から、吹き始めの木枯らしに吹かれて一斉に散り始める楓や銀杏の色づいた葉…までを、わずかに三日間の内にフルコースで楽しめた。二日目は櫻の時も紅葉の時も雨でしたが、この時も陽に照らされたり陽を透かしての紅葉は楽しめなかつたものの、それでも尚、例えば永観堂の紅葉など管光色であるかの…とく浮き出るような赤い光を放ち、息をのむほどの見事さであつた。

さてしかし、実はこの回の第一日目は翌日が雨予報でもあり、紅葉とは別にどうして、も、初めての深雪山上醍醐寺に登りたかつた。初めて(下)醍醐寺に行つた時には気付かなかつたが、その後、櫻の(下)醍醐寺を隅から隅まで堪能した時、ふと気が付いたのは、敷地境界のフェンスの向こう側、その外側にも櫻が見えていたが、そこを歩いて行くトレッキングスタイルの人の姿であつた。後で調べた処によると、実はその向こうにあるのが、深雪山上醍醐寺への道であつた。深雪山上醍醐寺(は)下(下)醍醐寺境内を拝観料を払って拝観しつつ奥に進み(下)醍醐寺の伽藍の最奥弁天堂まで進むと、出るしかできない柵(ほい)回転扉があり、そこを通り出ると前述のフェンスの外側の道と出会う。私どもは、体力に自信もなく(下)醍醐寺を復習しつつ深雪山上醍醐寺に登る事はやや考えにくく、(下)醍醐寺境内参拝は余力を見て考えることとした。従つて静かな朝私共は、総門を潜り、左手に三宝寺、右手に霊宝館を櫻の頃を思い出し語りつつ仁王門を目指す。仁王門に突き当たたら中へ入らず右折。霊宝館の塙沿いに直進。南の外れの

小門をくぐり、いん外へ此処は前述のフェンス沿いの道ではなく、更に下醍醐寺全体の外周、住宅街と境を接する街路からその延長線上の車道崩れの道となり、少し登ると直接成身院女人堂から深雪山上醍醐寺を目指す山道に繋がる。地元の方か、バイクで勢よく乗り付けて来るおばちゃん、散歩の様に深雪山上醍醐寺を目指す男性も居て、皆さんなかなかの健脚。あつと言う間に、消えていく。日常に、毎日お山詣でができるなんて羨ましくも思えたが、まさに市井の修験者、やはり鍛えられていて、飛ぶが如く…天狗の化身か…と思うほど。そんな地元の仙人男女に時折抜かれたついで、それでも少し登り、例の回転扉を左手に見ると(此処で外周の道とフェンス沿いの道と伽藍内参道が合流することになる)其処は成身院女人堂の入り口、深雪山上醍醐寺への入り口でもあり、石造の鳥居を潜る。此処で入山料として600円を払う(下醍醐寺伽藍からの入山者は500円、但し春と秋のシーズン中は拝観料を1500円、通常は800円既に払っている)。例の地元の天狗だか仙人だかは、何か定期券の様なものを提示して、手を上げるなど簡単な挨拶一つで素通りして行く…。入り口に金剛杖ならぬ丈夫そうな木の枝が何本も箱に立てられていて、誰でも遣えるようになっていて。多くが往復(ヒストン)なので遣つたら、次の人の為に戻しておけばいいのである。私は自前のストックがあるから大丈夫。同行者は旅行時は持参せず、それにも気がつかず途中で探して杖になりそうな枝を拾つて行つたが、帰りはそれを箱に入れて帰つた。少し登り始めると醍醐の花見』と云われ後世に残る雲が催された遺跡もあつた。私は、秀吉の家紋が金色に輝く勅使門があるので、三宝寺で開かれたのかと思つてしたが、まさに、山を拓いての大掛かりな花見の宴だつたのである。ことが理解できた。初めてらしい登山者も、我々よりは早く何人かに抜かれやがて上方に消えていった。成身院女人堂から不動の滝を経て上醍醐寺跡までは修行の道だが、息を上げて唯登る。道は整備されているが階段であつたり、中程度の石がゴロゴロ、足を取られそう得意と不安定で怖い。1時間と書いてあるがゆつり登ると、1時間半〜2時間は僕にかかる。立ち止まって休んでいて、その後合えなかつた人もいた。そこから戻つたのかも…やはり観光客の様子は幾分か無理なのかも…。紅葉の季節とは言え、日常の方々は兎も角、観光客で登つてくる人はそう多くはないし、ここなら観光外国人にも逢わずに済みそう。不動の滝は秋から冬に向け、水量も少なく、滝という感じでなく取り敢えず通過。この辺でカメラにメモリー容量一杯と出る。変だな、空に入れて入れたばかりなのに…」と思つたが、宿に戻つて落ちついて確認したら、SDカードを入れてなかつた、あ痛つ！一歳取つた…！それは兎も角、何が何でも登る。道端の標石の丁数は増えるが、目指すべき丁数が示されていないのであとどれぐらい?...が見えず(後の調べで、20丁まであつたそうです)…、特に道標もなく、ジグザグに登りに登る。しかし、登っているうちに、頭上や目指す眼前が明るくなつたり、傾斜角がゆるくなつたりで、稜線もしくは尾根筋に近付いたことはこれまでの経験で解る。やがて、更に上がない感じになり、杉の奥山から竹藪への変化。足もとの岩も、層をなして圧縮された感じの平板な堆積岩に変わる。海底が隆起した痕跡であり、近海生物の化石が潜んでいそうなワクワク感があつたが、此処で宝探しはしてられない。更に登り歩き、やがてネットで確認済みのトイレと斜向かいのネットで見たとおりの寺務所が現れる。寺務所左脇の道に、大きな看板で『参道』と朱書してあり、それに従つて寺務所の土塙沿いに進むと准胝(観音)堂(じゅんでいかんのんど)の案内板と手水があり門がある。しかし、准胝堂は幾度も火災に遭っているが、実はつい最近平成20年8月にも落雷がもたらした焼失しており、現在はない。従つてこのエリアは後として、更に先へ進む。寺務所群の上の道をやや登る。従つて、私どもの深雪山上醍醐寺参拝は国宝の薬師堂から始まつた。同行者は「んな山奥に国宝が在るなんて…！」と其処にまず感動していた。しばらく、その感動の余韻に浸る。説明を読み空気を感ずる。扉は閉ざされて居り、建物のみ他に何も無い。更に歩くにつれは重要文化財の五大堂、門前に結果があり、その正面に三体の銅像。中央が開祖理源大師聖宝その左が一世座主の観賢僧正、右が修験道の祖役小角の銅像である。堂内に入ると何も無い。壁面しかない。実はその前の須弥壇には五大明王が安置されて居り、或る時の櫻の春に見に入つた霊宝館に収蔵されていたらしかつたが、繋がない。櫻の時は、折角だからと櫻のついでに見に入つた感じで、また上醍醐という存在も解つていなかた。因みに五大堂もやはり何度か焼失している様ですから、その耐震防火造の霊宝館での収蔵が現代では必須なのだ、当たり前のごときをこの時、実感。また薬師堂内の薬師三尊像も霊宝館に安置されているので、帰宅後調べて解つたことである。そこで、もう一度改めて霊宝館も見直してみたいと思つた次第。森の中を通つて隣のピークに見え隠れしている、如意輪堂とその隣のちよつと下がた広い所に目指してきた開山堂がある。何れも、桃山時代のもので重要文化財であるが、准胝堂と懸造(かけづくり)の如意輪堂と開山堂は開祖理源大師聖宝が開山時に建立したものであるが、焼失と荒廃を繰り返す鎌倉時代にも再興されているが、最終的に豊臣秀頼により再建され、桃山時代の特徴を色濃く残している様だ。高野山でも感じたことだが、准胝堂の様に、平成になつても焼失してしまつて、木造建築は、現代なのに、これ程の物でも、燃えてなくなつてしまつものなのだ…、と何故かもの哀れ諸行無常を感じてしまった。

開山堂を少し下ると白川皇后陵が在った。贈皇太后である藤原堅子と白河天皇の皇女提子内親王と同じく皇女令子内親王の3人が埋葬されていて、全国御陵最難所の一つに数えられているとのこと。確かに此処は相当大変だが、皇族の陵ともなると、こんなところでもちゃんと保護されているものなのだ、驚く。いきなり下り出すのも惜しく、開山堂と懸造りの如意輪堂の辺をうろつろ、隅から隅まで拝観。特に開かれてもおらず、建物の外観のみであつたが、次がなさそうなきもして、心ゆくまで見た。弁当持参もフランクにはあつたが、ちよつと朝早く出たこともあり、コンビニに見放された感もあり、昼食は下山してからと考える事として、歩き回つて、目と心に焼き付ける。奥の院壹取山方向への道標があつた。ネットで確認した処では、奥の院までの記録は殆どアップされていない。それだけ行く人も俄然減り、荒れているらしい。しかし、ずんずん歩くと石山辺りに出るらしく、タクシーの運転手さんに、子どもの頃歩いて間違えて琵琶湖に出てしまひ、また山を戻つたみたいな話をして貰つたが、京都人は結構歩けるんだと理解し、山育ちで悪くないなとまたまた羨ましく思つた。さて、昼も過ぎたので下山。薬師堂から巻いて右手奥何か広く見えるところを目指す。此処が准胝堂がつい最近まであつた場所であつた。ネットでは、建設中とはあつたが、再建は別所なのか、そこはただの更地、跡としての説明もない。そこから、山の中腹に舞台の様にあるその更地の左右に降りる階段があり、右手を降りると途中清瀧宮本殿(昭和32年再建)があり、更にその下に国宝の清瀧本宮拜殿(室町時代再建)がありその先に醍醐水(醍醐寺の名の由来となつた霊泉：この霊泉が醍醐味と云う言葉の由来であつたか。しかし、いつか醍醐とは子一ズのことであり、醍醐味とはその美味なる味をさしたと聞いたこともあるような)。これにて、上醍醐観光登山終了。後は、下醍醐寺まで下るのみなのだが、登りより下りが怖ひ今日この頃、滑りそうでおおかなびつくり、事故の無いよう慎重に下りきり、同行者は前述の杖代わりにした枝を、箱に収める。中国人らしきカプセルが登ってくるのにすれ違つたが、立派な冬装備で、例によって半袖の私を見て……

成身院女人堂からの帰りは、朝採つた道のもう少し内側のフェンス直外をフェンスに添つて歩く。弁天堂の紅葉など下醍醐寺の中が一通りよく見える。今日は下醍醐拝観はこれでいいかと思う。五重塔などフェンス外から見ただが、近づくと迫力が在ると感じられたし。しかし、下醍醐寺と醍醐光台院と伝法学院と醍醐寺公衆トイレのある一角の道辺りで不覚にも足がふる。少し休み騙し騙し山用のストックを杖として突き、春混雑で入れなかつた雨月茶屋(逢い昼食を採るために向かう)。

さていよいよ後は紅葉の京都散策であるが、ダイジェスト風に。

市営地下鉄東西線醍醐駅に戻る。駅まで行けばタクシーに乗れると思つた。しかし、その止まつてもらつたタクシー「さき醍醐寺の門前にいた方……」と言われた、確かに客を下ろして走り去つたタクシーが2台ほどあつた。それは兎も角、それほど遠くないと思ひ、先ず初日は午後の時間に食ひ込み午後3時頃の東福寺へ1993年から始まつた『つた』京都行こう。』のJRのポスターでも、1997年秋のバージョンに東福寺の通天橋『中央からやや引き気味に回廊を透して見下ろした感じの超ワイドな一面の紅葉した楓がポスターになつている。このポスターどれも、よくよく見ると、コメントがある。東福寺のそれには「六百年前、櫻を全部切りました。春より秋を選んだお寺です。」そして少し離して小さい文字で紅葉のベストポジションは、修行の道でした。」があり、更に小さく中央下段に東福寺の境内は千松林といい松の木が植わり溪谷には桜の木があつた。桜の木を愛するあまり多くの桜の木を植えれば、後世かならず遊興の場となるからと伏採した。天通橋を架け、楓の樹林となつたが明治初年には楓も修行のさまたげになるからと伏採した記録があります。」と。今や客寄せ楓……?」等と云つてはいけないのだろうか、拝観料を取るようになつて以降、多くの檀家の居ない観光寺院が客寄せのためにあれこれ手を入れてるが、更に檀家がいて墓地などがあつても尚、集客に余念のない寺院もある、流石現代である。そうでもしないと維持できないと云つこともあるのだろうか……。さて東福寺、仮設券売所で入場券を買つて庭園から入場、いきなり楓の紅葉を堪能できる。既にほろ酔い外なので慰安風のグループは顔を赤らめはしゃぐ。中国人風の集団も、写真の撮りあいなどが大変。観光地京都を実感、上醍醐との落差も実感。流れで庭園から通天橋に入れる。通天橋から溪谷を埋めつた楓の紅葉を見つづつ往復



し更に開山堂(進む。開山堂には紅葉はないが、そこを回るまでの回廊からは周囲の紅葉が見えていた。方丈庭園も特別公開等との誘ひに乗つて、拝観。しかし実は、東福寺で私が好きなのはその外の臥雲橋。屋根の架かた木造の橋で、ここから東福寺の中の溪谷とその溪谷を覆う楓と更にその上に通天橋が見える。この風景もJRのポスターになつているが、確か季節は夏、青紅葉の頃の写真、サイクリング自転車を押して通る涼やかな若い女性の背景に、通天橋までの緑の遠景が映り込んで居り、この感じが私も好きだつた。しかし更に、この臥雲橋から紅葉の東福寺を見ることができた事は、感激であつた！恰も、紅葉の海の上に通天橋が浮いているように見えた。

二日目は前述の通り櫻の時同様、雨。この日は夜、食事の予約をしてあり、一旦3時過ぎには宿に戻つてシャワーを浴びて、服を着替えてから行くと言ふ計算で、近場の紅葉を見る事にする。久々に？哲学の道を北上してみたく、南禅寺まで歩いて10分程度の所にある宿に居り、櫻の良かった南禅寺から、行きそこなつた永観堂、少し哲学の道も歩いて、哲学の道を離れ、真如堂へ渡り金戒光明寺(櫻を求めて彷徨する)。

南禅寺はやはり桜の紅葉がまず人目を引いていた。前回は時間の関係で入れなかつた方丈庭園も拝観。禅寺の庭園だけに此処には紅葉はなかつたが、以前見た通りの景色がそこに在り、思ひ出した。

続いて禅林寺永観(えいかん)ようか堂。此処の紅葉が今回の旅で最高であつた。堂光色のようにも見える、楓の紅葉が素晴らしく、これで晴れていたら如何様に見えるのか、ちよつと欲を出して残念な気もした。永観堂内は久々で全部見た感じ。長く改修工事をしており、見返り阿弥陀さまも立派に改修なつた阿弥陀堂(本堂)に安置され、入れ代わり立ち代わり、多くの紅葉見物者を楽しませていた。此処にも私の好きな場所がある、それは臥龍廊。カーブして昇る木造の階段状回廊が開山堂へと続く。意外と見返り阿弥陀人気におされ、ここまで足を延ばす人が少なく、此処はゆるくり楽しめた。

次は、哲学の道。雨しきりで哲学の道は水たまりだらけ。一寸参っていると、今まで気付かなかつた、叶匠寿庵京都茶室が目に入り、そこで昼食。その後はさきと、哲学の道を下り、鹿ヶ谷通と白川通りを渡つて真如堂(真正極楽寺)へ昇る。このルートだと裏から入る感じが、ちゃんと住宅街から直接のぼれる細道がある。真如堂は、三重塔と楓の紅葉で有名らしく、公式ホームページは三重塔を取り巻く紅葉の写真が一杯。明日は何かの法要のある日とかでの雨天で準備が遅れが出そうとかの話の小耳に挟みながらの紅葉見物となる。永観堂の赤とは違つたが、既にやや黄色みがかつた紅葉がグレイの雨空に美しく映えていた。私の好きな三重塔も、今日は少し控えめに見えた。正面門から退出、次なる黒谷金戒光明寺を目指す。

以前行つたときは逆コースであつたが、改修工事中で拝観できるところが少なく、見られるところは隅から隅まで拝観したのを覚えている金戒光明寺である。真如堂からだと裏から入る感じが長い階段の参道を登らないで済む、いきなり御影堂大方丈・清和殿と続く伽藍本体に着く。秋の特別公開中にて、御影堂、清和殿、紫雲庭園(公開中)と山門(公開中)想定外に、参拜できる場所が多く、前回とは比較にならない時間をかけての参拝となつた。山門も公開中は登れる様で、南禅寺山門とは違つた京都市街の風景が楽しめた。黒谷一帯は維新の頃は会津のテリトリーで、新選組も闊歩していたのである……。因みに、此処の三重塔の近くには、会津墓地もあつた。(次回 初めての場所①)では、初めの時の金戒光明寺、真如堂、哲学の道の逆コースを掲載)

三日目は最終日。天気は昨日ほど悪くはなく、一応晴れ。特に計画もなく駅まで出て、さて……。バスターミナルには夫々の目的の地への乗り場に延々長蛇の列、行楽シーズンである。盛んに呼びかけている割に並んでいないのは高山寺方面行のバス実は発車した直後であつたらしい。私共としては、少し前に行つたばかりではあるが、山だし紅葉も良いかと思ひ、高山寺から神護寺まで歩くことにして、そこに並ぶ。ゴールデンウィークの後辺りに行つた時の話は既に書いたが、今回は紅葉シーズン……と思つて期待したが、昨日の永観堂の様な紅葉真(盛り)と云うより、少し盛りを過ぎた感じ……。今回の高山寺は表参道から金堂への石段を息を上げて登りきる。針葉樹林帯の山の中、記憶も新しく、初めての観光とは違ひ、歩きた感じ。昨日の雨の湿気で冷たさを感じつつ、ヒヤッとする境内を滑らない様に注意しつつ、歩くといつより登る。堂々たる大きな自然石のような灯籠の間を通り抜け、杉の木の森が深山を思ひ起こさせる参道を登りきると金堂。初めての時は、ここをこの様にして登らなかつた。紅葉は今一だつたが、キチンと登れたのは良かった。石水院は省略。

周山街道をやや下り、途中清滝川へ下る道を探り西明寺へ前回と打つて変わった。境内はカメラの砲列、何を待っているのか、ガヤガヤ。寺内も拝観し、正門を通らず裏から清滝川へ出て、神護寺へ

神護寺では参拝の前に腹ごしらえ。前回と同じ茶屋に入る。この前に来た時はおじさんが一人で店番をしていたが、今回は女手ばかりが厨房にあふれていた。高雄は今がシーズン。紅葉は今一でも、人出はシーズン真(中)といふ感じ。例のかわらけ投げの

あたりの紅葉はますますであつた。一応投げてみたら、投げ捨てたようでもなかつたが、風に乗せるまではいかなかつたのが残念。前歩いた清滝川沿いの道が見えていて、錦雲峡と呼ばれる一帯の紅葉も遠望できた。

神護寺バス停に並び其処から京都に戻る、四条大宮駅(前)で途中下車してタクシーで真(直)ぐ南の東寺へ旅の終わりが近づく。今回も、締めは東寺、東寺の桜の紅葉を楽しむ。

既に今年度4月号を以って終了したはずの旅シリーズですが、未公表のものや書きかけのものがマイドキュメントに幾つかあり、幾分か校正し完成させて皆様の目に触れさせて頂く事とし、7月号から掲載させて頂いて居りますが、余韻として読み捨て御免で悪しからず。

社会福祉法人久良岐母子福祉会

久良岐便り第53号

別冊